The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	問いと推論
Author(s)	入江, 幸男
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2014, 48, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56591
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

問いと推論

入 江　幸 男

キーワード：理論的問い／実践的問い／理論的推論／実践的推論

考えるということは、問いを立てそれに答えることである。他方では、考えるということは推論することでもあるだろう。それでは、この問答と推論はどのように関係しているのだろうか。それを明らかにすることは、論理学や認識論の研究だけでなく、自然科学や人文社会学の方法の研究にとっても重要である。またこの二つの関係の考察は言語哲学にとっても重要である。発話の意味は、それを答えとする問いとの関係で理解可能になる（「コリングウッド・テーゼ」[1)]）。他方で、発話の意味を推論の中での働きによって理解しようとする推論主義の意味論がある。意味論を研究する場合のこの二つの方向が正しいとすれば、私たちは問いと推論の関係を明確にすることによって、より適切な意味論に到達できるだろう。

以上のような関心から、ここでは第一に、推論は問いに答えるために行われるということ、言い換えると推論は問いをある意味で〈前提〉するということを証明したい。その際、問いを「理論的問い」と「実践的問い」に区別し、それらに答えるための推論をそれぞれ「理論的推論」と「実践的推論」として定義し、それらの問いと推論の関係を考察する。第二に、「理論的問い」と「実践的問い」がどのようにして生じるのかを考察し、それぞれ四つのケースに分けて問いの発生の論理的なメカニズム、つまり推論と問いの関係を明らかにする。

第1節　推論は問いを〈前提〉する

1　理論的問いと実践的問いの定義

（1）他者との対話における場合の問いの区別と定義

まず二種類の問いを定義しよう。「理論的問い」とは、その答えが真理値をもつ主張となる問いである。「実践的問い」とは、その答えが命令や約束などの真理値を持たない意図表明となる問いである。

ところで、同じ文の発話が、意図表明となったり、真理値をもつ主張となったりすることが可能である。例えば「これはあなたのものです」は事実の主張である場合も、譲渡の意図表明である場合もある。従って、以下の問いや推論の考察は、文ではなく発話を対象にする。なお、事実を記述する真理値をもつ発話を「主張発話」と呼び、依頼、命令、約束、感情的な態度表明、宣言などの真理値をもたない他者に向けられる発話を、「意図表明発話」と呼ぶことにする。サールは、発語内行為を5つのタイプに分けた（主張型、行為指示型、行為拘束型、表現型、宣言）が、私がここで「意図表明発話」と呼ぶのは、サールのいう行為指示型、行為拘束型、表現型、宣言を含むものである。このかぎりで、サールに多くを負っている。しかし、質問発話については、サールの意見に同意できない。サールは、質問発話を、行為指示型の中の依頼の発話の一種と考える。[2] しかし、私は質問発話を、行為指示型を含む意図表明発話とは異質なものと考えている。[3]

（2）自問自答の場合における問いの区別と定義

ここでも二種類の問いを定義しよう。「理論的問い」とは、その答えが事実について述べる真理値をもつ発話となる問いである。「実践的問い」とは、その答えが真理値を持たない意図決定の発話となる問いである。

ここでの事実について述べる真理値をもつ発話を、対話における主張発話と区別して「事実発話」と呼ぶことにする。対話における意図表明発話と区

別して、自問自答において何かを意図するときの発話を単に「意図発話」と呼ぶことにする。自問自答における問いの発話「疑問発話」もまた真理値を持たない発話であるが、意図発話とは別のものとして扱う。

（3）対話と独話における発語内行為について

対話における発語内行為については、サールによる詳細な分析がある。しかし自問自答における発話が行っていることは、対話における発語内行為ではない。事実発話は、主張発話と同じく真理値をもつが、しかし主張発話とは異なり、他者に何かを伝えようとするものではない。また意図発話は、他者に対して命令、約束、態度表明、宣言などを行うものではない。しかし、これは単なる命題行為でもない。発話によって同時に何かを行っている。その意味では発語内行為に似ている。サールが他者に対する発語内行為について指摘したのと同様に「適合の方向」（direction of fit）をもつからである。事実発話は、主張発話と同じく言語から世界への適合の方向をもち、意図発話は、約束や命令と同様に世界から言語への適合の方向をもつ。そして対話における質問発話が、その返答が行う発語内行為を指示しているとの同様に、独語における疑問発話はその答えが行う発語内行為を指示している。サールは、発語内行為を行うことなく、命題行為をなすことは不可能であると主張した。これは自問自答の発話に関しても正しいだろう。独話発語内行為を行うことなく、命題行為をなすことは不可能である。しかし、独話発語内行為の方がより基礎的であるとか原初的であるというのではない。むしろ歴史的にもまた幼児の発達においても、対話において言語が成立し、その後で独話が可能になったと考えられるので、独話発語内行為は、対話における発語内行為から派生したものと考えられる。

2　自問自答における理論的推論と実践的推論の定義

まず二種類の推論を定義しよう（後述するように、これらから派生する推論の形態も考えられるが、次の二種類の推論が基本的なものだと考える）。

「理論的推論」とは、一つないし複数の事実発話（前提）が真であるならば、一つの事実発話が必ず真であるような事実発話の組み合わせである。

「実践的推論」とは、一つの意図発話、また多くの場合にはこれに加えて一つないし複数の事実発話が前提を構成し、一つの意図発話が結論を構成しており、①前提にコミットするならば、必然的に結論にコミットするような発話の組み合わせのこと、あるいは、②前提にコミットするならば、結論にコミットすることが可能になるような発話の組み合わせのことである。ここでの①と②は次のような推論となる。

実践的推論①

Xを実現しよう

Xを実現する唯一の手段は、Yを実現することである。

∴　Yを実現しよう。

実践的推論②

Xを実現しよう

Yを実現すれば、Xを実現できる。（Xを実現するには、Yを実現するのがよい）

∴　Yを実現しよう

実践的推論①はウリクトが提案したもの、実践的推論②はアンスコムが提案したものに対応するだろう。[4)] ①では、Xを実現するためには、Yを実現することが必要であることが示されている。しかし、このようなケースは稀であろう。大抵の場合、あることを実現するための方法は複数ある。そのような場合にも私たちは何らかの実践的推論をしているのだとすると、②の方を実践的推論の一般的な形式と考えることができる。

ちなみに、次のような混合型の推論もある。（a）前提に意図発話があり、結論が主張になるような推論を理論的に構成することは可能である。なぜなら、前提に含まれる真理値をもつ発話だけから、結論の主張が帰結することが可能だからである。あるいは、ある一つの意図発話から事実発話を論理的に導出するとも可能である。たとえば、「その塩をとろう」から「それは塩

である」が導出可能である。また、意図発話から導出可能な事実発話と、他の事実発話を前提として、別の事実発話を導出する推論も可能である。これらを、「実践理論推論」と呼ぶことにしたい。（b）全ての前提が主張であるのに、結論が意図発話になる推論もまた、構成することが可能である。なぜなら、前提である主張へのコミットから、結論となる意図がコミット可能であることを推論できるならば、上記の実践的推論②の定義に従って、この推論が成り立つといえるからである。これらを「理論実践推論」と呼ぶことにしたい。

なお、対話における推論の中には、自問自答における推論に実質的に還元できるものもあるが、還元不可能なものもあり、重要なテーマであるが、紙数の都合により、ここでは扱わない。

3　理論的推論は理論的問いを〈前提〉する

理論的推論では、前提が真であれば、結論が真となる。しかし、理論的推論において、前提が真であるときに、必然的に真となる文は、一つではなく多数ある。例えば次の∴以下の文は全て、結論になりうる。

すべてのペンギンは鳥である
すべての鳥は卵を生む
―――――――――――――――――――――――――――――
∴　すべてのペンギンは卵を産む
すべての卵を産まないものは、ペンギンではない
あるペンギンは、卵を生む（卵を産むペンギンがいる）
卵を産まないペンギンはいない
すべての鳥でないものは、ペンギンではない
すべての卵を産まないものは、鳥ではない

このような事態にもかかわらず、一つの文が結論として選ばれるのは何故だろうか。それを説明するには、推論はある問いに答えるために行われるのであり、推論の結論は問いの答えとなるのだと考える必要があるだろう。たとえば、次のような問いに答えるために推論が行われる。

ペンギンは卵を産むのか？　（理論的問い1）
すべてのペンギンは鳥である
すべての鳥は卵を生む

∴　すべてのペンギンは卵を産む　（理論的問い1への答え）

従って、同じ前提をもつ推論であっても、別の問いに答えるために推論が行われているのであれば、その結論は別のものになるだろう。

卵を産まないペンギンはいるか？　（理論的問い2）
すべてのペンギンは鳥である
すべての鳥は卵を産む

∴　卵を産まないペンギンはいない　（理論的問い2への答え）

従って、私たちは、理論的推論は、理論的問いを〈前提〉するといえる。ただしこの場合の〈前提〉は、論理学で通常用いる「前提」と意味が異なるので〈 〉を付けた。

4　実践的推論もまた実践的問いを〈前提〉する

理論的推論の場合と同様に、実践的推論においても前提から帰結する結論は多数ありえる。実践的推論①について考えてみよう。

実践的推論①

Xを実現しよう
Xを実現する唯一の手段は、Yを実現することである

∴　Yを実現しよう
Yを実現できないときには、Xの実現を諦めよう
Yを実現しようとしないなら、Xの実現を諦めなければならない
Xの実現を意図するならば、Yの実現を意図する必要がある
Yを実現しなければ、Xを実現することはできない

実践的推論②の場合も同様に考えられる。ところで、同じ前提をもつ実践的推論であっても、別の問いに答えるために推論が行われているのであれば、その結論は別のものになるだろう。具体例をあげよう。

窓を修理しよう
ホームセンターで道具を買えば、自分で修理ができる

∴　ホームセンターで道具を買おう
自分で修理しよう
ホームセンターに行こう

窓を修理しよう
どうやって、窓を修理しようか？　（実践的問い1）
ホームセンターで道具を買えば、自分で修理できる

∴　自分で修理しよう　（実践的問い1への答え）

窓を修理しよう
窓を修理するために、何をしよう？　（実践的問い2）
ホームセンターで道具を買えば、自分で修理できる

∴　ホームセンターで道具を買おう　（実践的問い2への答え）

窓を修理しよう
窓を修理するために、まず何をしようか？　（実践的問い3）
ホームセンターで道具を買えば、自分で修理できる

∴　ホームセンターへ行こう　（実践的問い3への答え）

このように、実践的推論は、実践的問いを〈前提〉している。また、理論的推論も、理論的問いを〈前提〉している。つまり、全ての推論は問いを〈前提〉することによって可能になっている。従って私たちが推論を考察するときには、その推論がどのような問いを〈前提〉することによって可能になっているのかを常に注意しなければならない。

以上のように理解するときの推論を「問答推論」と呼ぶことにし次のように定義したい。「理論的問答推論」とは、一つの理論的問いと一つないし複数の真なる発話を〈前提〉とするとき、必ず真となりかつその理論的問いの

答えとなりうる発話を結論とするような疑問発話と事実発話の組み合わせである。「実践的問答推論」とは、一つの意図発話と一つの実践的問いを、また場合によっては一つないし複数の主張を〈前提〉とし、実践的問いに対する答えとなりうる意図発話を〈前提〉とし、①〈前提〉にコミットするならば、必然的に結論にコミットするような発話の組み合わせである、あるいは、②〈前提〉にコミットするならば、結論にコミットすることが可能になるような発話の組み合わせである。

第2節　問いはどのようにして生じるのか

このように推論は問いに答えるために行われるのだが、では問いはどのようにして生じるのだろうか。ここでは、理論的問いと実践的問いがどのようにして生じるのかを考察しよう。その中でこの二種類の問いの関係も明らかになるだろう。

1　理論的問いはどのようにして生じるのか

理論的問いが生じる場合は、次の4つに区別できると思われる。

（1）別の理論的問いに答えるために設定される。
（2）二つの事実発話の矛盾に気づいたときに理論的問いが生じる。
（3）実践的問いに答えるために設定される。
（4）他者から理論的問いを問われて答えるために自問する。
（対話におけるこの問答の分析は本論では扱わない。）

（1）別の理論的問いに答えるために設定される

理論的問いは、別の理論的問いに答えるための推論を構成するために、そしてその推論のある前提を獲得するために、設定されることがある。次のような場合である。

ペンギンは卵を産むのか？　（理論的問い1）

鳥類は卵を産む　（事実発話1）
もしペンギンが鳥類なら、ペンギンは卵を産む　（事実発話2）。
ペンギンは、鳥類か？　（理論的問い2）
ペンギンは鳥類である　（理論的問2への答え）
ゆえに、ペンギンは卵を産む　（理論的問1への答え）

上記の下線を引いた3つの命題が、理論的問い1の答えを結論とする推論になっている。

（2）二つの事実発話の矛盾に気づいたときに理論的問いが生じる

二つの事実発話が矛盾していても、それだけでは問いは生じない。まず、その矛盾に気づくことが必要である。二つの事実発話の矛盾に気づく場合は幾つかに分けられるだろうが、この文脈で重要だとおもわれるのは、推論している途中で気づく場合である。例えば、pからqの否定が帰結したとき、pとqが矛盾することに気づく。しかし、矛盾に気づいたとしても、それだけでは、問いは生じない。その矛盾を解決する必要性がなければならない。その必要性はどこから生じるのだろうか。それは問いを解こうとすることから生じる。人が理論的推論をするのは、何かの理論的問いに答えようとするときである。その理論的問いに答えようとして、推論しているときに矛盾に気づいたとすると、理論的問いに答えるためにはその矛盾を解決する必要がある。私たちにとって命題の集合の矛盾が解決すべき問題となるのは、問いを解こうとしている時である。ここで「この矛盾を解決するにはどうしたらよいのか」という理論的問いを立てる必要が生じる。このような場合（2）は、（1）の特殊ケースである。

（3）実践的問いに答えるために設定される

「Xを実現するために、どうしよう」というような実践的問いに答えるために理論的な問いを立てることが必要になる場合がある。これについては後述する。

（4）他者から理論的問いを問われ、答えるために自問する場合

この対話における問答の分析は本論では扱わないが、上記のケースとの関連を述べておきたい。（2）のケースの一部は、（1）の特殊ケースであった。（1）のケースでは、理論的問いが生じるのは、別の理論的問いに答えるためであった。この別の理論的問いもまたさらに別の理論的問いに答えるためであるかもしれない。しかしこれが無限に遡行しないためには、このような系列における最上位の理論的問いは、（1）以外の仕方で生じるのでなければならない。この最上位の理論的問いは、（2）の一部か（3）か、他者との対話の中で生じることになる。

2　実践的問いはどのような場合に生じるのか

よく議論されているように、意図を行為内意図と事前意図に区別できるだろう[5)]。このどちらの場合であっても、意図は常にそれと衝突する事実認識を伴っている。ただし、行為内意図が事実認識と衝突している時には、そこに実践的問いは生じない。なぜなら意図はすでに実現されつつあり、それゆえに意図の実現方法について問う必要がないからである。他方、事前意図が事実認識と衝突するときには、常にではないが意図の実現方法について問う必要が生じる。つまり、実践的問いは事前意図と事実認識の衝突から生じる。

ところで、事前意図は、次の二つに分けられる。

（a）ある条件が満たされた時に、直ちに実行される事前意図（PIa）

（b）意図を実行するには、その実現方法を決定する必要がある事前意図（PIb）

（a）の場合、例えば「信号が青になったら、横断歩道を渡ろう」の場合、時間や場所や状況などが満たされたことを認識すれば、事前意図は行為内意図＋行為へ移るので、実践的推論は生じない。（b）の場合には、「X を実現するために、どうしようか」という実践的問いが生じる。ところで（a）と（b）の

差異は何かだろうか。言い換えると、意図を実行するためにその実現方法を決定する必要があるのは、どういう場合であろうか。私たちの行為は、基礎行為[6)] にまで分解可能であるが、歯を磨くとか、コーヒーを淹れるとか、横断歩道をわたる、などの習慣化された行為は、それを基礎行為から考えながら構成しなくても習慣的に自動的に行うことができる。しかし、基礎行為でなく、こうした習慣的な行為でもない行為の場合には、「X をしようと意図した後に、どうやってそれをするか」を問う必要があり、その実現方法を決定する必要がある。このような(b)の場合を、更に次の二つに分けることができる。

（1）複数の実現方法があり、一つを選択しなければならない場合の事前意図（PIb1）

（2）実現方法が分からない場合の事前意図（PIb2）

（PIb1）の場合。事前意図につづいて「x を実現するのに、どのやり方でやろうか」という実践的問いが生じる。

X を実現しよう（意図1）

X を実現するために、どうしようか？（実践的問い1）

X を実現する方法が、複数ある

X を実現するのに、どのやりかたでやろうか？（実践的問い2）

どれが最適な方法であるか解らない（事実認識）

X を実現するために、最適な方法はどれか？（理論的問い）

X を実現するための最適な方法は、Y を実現することだ（理論的問いへの答え）

Y を実現しよう（実践的問い2への答え）

最終的に上記の理論的問いに答えられない時（あるいは、選択肢を幾つかに絞ることはできても、最終的に一つに絞ることができない時)、私たちはどうするだろうか。私たちは、「x を実現しよう」という意図をもっているのだから、選択肢の中から一つを決断によって選び出し、それを実現しようとするだろう。また最初から理論的問いを立てることなく、決断によって一つ

の手段を選び出してそれを実現しようとする場合もあるかもしれない。

（PIb2）の場合。意図の実行方法が分からないので、そのような意図はむしろ目標、計画などと呼ばれることの方が多いかもしれない。この場合に立てられる「どうやってXを実現することができるか」という問いは、理論的問いである。

Xを実現しよう（意図）

Xを実現するために、どうしようか？（実践的問い）

その実現方法が分からない（事実認識）

Xを実現するために、どうすればよいのか？（理論的問い）

この理論的問いに対する答えは「Xを実現するには、Yを実現すればよい」という形式の真理値をもつ記述になるだろう。この答えに続いて、実践的問いへの答えが得られるだろう。

Xを実現するには、Yを実現すればよい（理論的問いへの答え）

Yを実現しよう（実践的問いへの答え）

この結論「Yを実現しよう」の意図には、上記と同様の三通りの意図（PIa, PIb1, PIb2）がありうる。上記の理論的問いの答えが得られない時、私たちは、Xを実現しようという意図を諦めることになるだろう。

実践的問いが生じる場合は、次の4つの場合に分けられるだろう。

（1）上位の実践的問いに答えるために実践的問いが立てられる。

（2）複数の意図が衝突するとき実践的問いが生じる。

（3）複数の意図が調整を必要とする時、実践的問いが生じる。

（4）他者から実践的問いを問われて答えるために自問する。

（他者との対話における問答については、本論では扱わない。）

（1）上位の実践的問いに答えるために実践的問いが立てられる

まず次のようなプロセスを考察しよう。

Xを実現しよう　（意図1）

Xを実現するにはどうしようか？　（実践的問い1）

Xを実現するには、Yを実現するのがよい（事実認識）

Yを実現しよう　（実践的問い1への答え）

Yを実現するにはどうしようか？　（実践的問い2）

この実践的問い2は、実践的問い1に答えた後に、問われるものであり、実践的問い1に答えるプロセスの中で問われるのではないようにみえる。しかし、実践的問い1への答「Yを実現しよう」は、その実現方法が明確になるまでは、暫定的な答えである。もしYを実現できないとわかった時には、実践的問い1は、もう一度問い直される必要がある。また、もしYを実現するためにZを実現する必要があることが分かったとすると、Xを実現するためには、Zを実現する必要があることになる。この場合には、「Zを実現しよう」が「Xを実現するにはどうしようか」の実践的問い1への答えとなる。しかし、これもまた暫定的な答えである可能性がある。最終的な答えが得られるのは、完全に実現可能であることがわかっている実現方法つまり事前意図（PIa）が答えとして与えられるときである。

（2）複数の意図が矛盾する時、実践的問いが生じる

「Xを実現しよう」「Yを実現しよう」と意図していて、その二つの意図が両立しないことがわかったとき、「Xの実現とYの実現のどちらを優先しようか」という実践的問いを立てることになるだろう。では、どのような場合に、二つの意図の矛盾に気づくのだろうか。それがすぐに分るような矛盾ならば、二つの意図の中で後から形成されるものが、実践的推論の結論として形成されるときに気づくはずである。そしてその意図の形成が回避されるはずである。しかし矛盾がすぐに分からない場合には、二つの意図が形成された後で矛盾に気づくことになるだろう。「Xしよう」という意図に基づいて、「X（ないしY）を実現するために、どうしよう」という実践的問いを立て、それに答えようとしているときに気づくのである。このとき「Xの実現とYの実現のどちらを優先しようか」という実践的問いが生じる。この実践的問いは、「XとYのどちらかを実現しよう」という意図を実現するために生じ

ている。ただし、この意図は、「Xしよう」という意図と「Yをしよう」という二つの意図を前提しているので、それらの上位の意図ではない。

（3）複数の意図が調整を必要とする時、実践的問いが生じる

「この夏、海に行こう」と「この夏、山に行こう」という意図は、時期をずらせば両立可能である。そのためには二つの意図の実現方法を調整する必要がある。それは、「どうやって、Xの実現とYの実現を両立させようか」という実践的問いになるだろう。この場合にも、二つの意図を調整しようとする意図は、元の二つの意図より上位の意図であるのではない。

（4）他者から実践的問いを問われて答えるために自問する時に実践的問いが生じる

この対話における問答の分析は本論では扱わないが、上記のケースとの関連を述べておきたい。すべての実践的問いは、ある意図Xについて「Xを実現するためにどうしようか」という問いであるだろう。コリングウッド・テーゼが主張するように、[7] すべての意図は実践的問いへの答えとして成立するのだとすると、この場合の別の意図Xもまた実践的問いへの答えとして成立することになる。そのためには、別の意図Xはより上位の別の意図を必要とする。これは無限に遡ることになる。自問自答の範囲で考える限りこの無限遡行を避けることはできない。それを避けるためには、最初の実践的問いは、他者から問われた実践的な問いに答えるために自問する場合だと考える必要がある。

結論

第1節では、自問自答における問答と推論の関係を考察した。問いを理論的問いと実践的問いに区別し、推論を理論的推論と実践的推論に区別する時、理論的推論は、理論的問いに答えるプロセスであり、実践的推論は、実

践的推論に答えるプロセスであることとがわかった。つまり、推論は問いを〈前提〉することによって成立する。第 2 節では、問いがどのようにして生じるのかを考察した。問いは単独で生じるのではなくて、他の問いと関連しており、推論もまた同様である。そこでは理論的問いと実践的問いが発生するケースをそれぞれ 4 つに分けて説明した。しかし以上の考察はまだ不十分である。今後の課題の一つは、対話における問答と推論の関係の分析へと議論を拡張することである。

［注］

1） Cf. Yukio Irie, 'A Proof of Collingwood's Thesis' in *Philosophia Osaka*, Nr. 4, 大阪大学文学研究科哲学思想文化学発行 , 2009, pp. 69-83.

2） J. R. Searle, *Expression and Meaning*, Cambridge U.P. 1979, p14.

3） 参照、入江幸男「発語内的否定と質問」、『大阪樟蔭女子大学論集』第 29 号、pp.201-217、1992 年 3 月所収

4） Cf. Anscombe, *Intention*, 1957 2nd version 1967 (アンスコム著『インテンション』（第二版の訳）菅豊彦訳、産業図書、1984 年), Anscombe, 'Practical Inference,' in R. Hursthouse, G. Lawrencee and W. Quinn (eds.), *Virtues and Reasons,* I-34, Clarendon Press, 1989, Von Wright, 'On So-Called Practical Inference,' *Acta Sociologica* 15, pp. 39-53, J. Searle, Rationality in Action,（サール著『行為と合理性』塩野直之訳、勁草書房、2008 年）

5） Cf. J. Seale, *Intentionality*, Cambridge UP. 1983, Chap. 3.（サール著『志向性』坂本百大監訳、誠信書房、1997 年、第三章）

6） Cf. Arthur Danto, 'What We Can Do' in *The Journal of Philosophy*, Vol. 60, No. 15, pp. 435-445.

7） Cf. Yukio Irie, 'A Proof of Collingwood's Thesis' in *Philosophia Osaka*, Nr. 4, 大阪大学文学研究科哲学思想文化学発行 , 2009, pp. 69-83.

（文学研究科教授）

SUMMARY

Question and Inference

Yukio Irie

The meaning of an utterance can be understood only in relation to a question to which the utterrace is an answer ('Collingwood thesis'). On the other hand, there is an inferentialist theory of meaning. If these two approaches to the theory of linguistic meaning are correct, then we could reach a more profitable theory of meaning by making the relationship between a question and an inference explicit. We will argue the following two points.

In the first section, we analyzed the relationship between questions and inferences in monologue. Questions are divided into theoretical and practical questions and inferences are also divided into theoretical and practical inferences. We found that the theoretical inference and practical inference are processes for answering the theoretical question and the practical one, respectively. All inferences turned out to *presuppose** the questions. (We did not inquire whether the process of answering a question always becomes an inference.)

In the second section, we analyzed how questions arise. A question comes into existence not in isolation but in relation to other questions and inferences. So, we explained the cases in which a theoretical question and a practical one arise. This research is ongoing. One point requiring further work is the analysis of cases in dialogue. Another such point is that we need to inquire about the distinction between a desire and an intention. The analysis of the complicated relationships among questions and inferences concerns research regarding not only interrogative logic but also the theory of meaning.